

米国キッコーマン・フーズ50周年

海外生産8工場体制の礎に

今6月、キッコーマンしょうゆ海外展開の礎となった製造会社KFI（キッコーマン・フーズ社）
米国・ウイスコンシン州ウォルワース）が製品出荷50周年を迎えた。

早くも1868年に米国へのしょうゆ輸出を始めていた同社は1957年、サンフランシスコに販売

会社キッコーマン・インターナショナル社（現在のキッコーマン・セールスUSA社）を設立し、67年に加州オークランドで日本産しょうゆの瓶詰を始めなど、しょうゆの販売を加速させてきたが、需要の拡大に伴い、72年には国外初の生産拠点としてKFIを設立し、翌73年、初出荷を行った。

ウイスコンシン州ウォルワースに工場を建設したのは、①北米全域にしょうゆを流通する中心に位置する、②小麦と大豆の大産地に近い、③良質な地下水が

豊富にある、④全米有数の酪農地帯を背景にした勤勉な労働力——の4つが決め手だった。

その後、西海岸の需要増に対応するため、98年に第2工場を加州フォルサムに建設。現在の全米におけるしょうゆの販売額は73年当時の約30倍

の海外展開の礎となった。同社の茂木友三郎名誉会長・取締役会議長は現地で行われたプレス視察団との懇談会で海外事業展開の原動力について、「しょうゆが米国文化にも馴染む万能調味料であったこと、早期に工場を建設したことで米国の人々が自分たちのブランドとして評価してくれたこと、優秀な人材を現地に送り込んだこと」などを挙げ、「本醸造の高品質なしょうゆが欧米にはなかったこともベースにある」とした。

また、工場建設の経緯を振り返り、「当時の資本金を上回る巨額投資への躊躇や設立当初の多くの苦難を乗り越え、確固たるビジネスモデルとして世界8工場体制での海外事業展開につながった。その甲斐あってキッコーマンの海外比率は直近で、売上高で7割、事業利益では8割を超えるに至っている。2030長期ビジョンには、しょうゆをグローバルスタンダードな調味料にすることを明示しているが、万能調味料のしょうゆは、世界各国の料理との相性もよく、今後も需要が伸びる可能性が高い」などの期待を示した。

また、同社はKFI50周年を記念して、ウイスコンシン大学メイソン校の農業生命科学部へ300万ドル、同大学ミルウォーキー校の淡水科学部へ200万ドル、計500万ドルの寄付を行った。同社はKFI

20周年を記念して設立したキッコーマン・フーズ・ファ

善活動に寄付しているが、今回の寄付について茂木名誉会長は、「第二の故郷であるウイスコンシン州の役に立てて嬉しい。企業の繁栄には地域社会との共存共栄が不可欠。キッコーマンが醸造するしょうゆは、水、大豆、小麦、塩の自然原料のみを使っている。今回、2つの研究プログラムへ寄付することが、将来にわたって同州の農業システムの発展と、天然資源の持続可能な確保につながることを祈念している」などとコメントした。

（石母田健）



KFI（キッコーマン・フーズ社）外観

2工場を加州フォルサムに建設。現在の全米におけるしょうゆの販売額は73年当時の約30倍



茂木名誉会長

り越え、確固たるビジネスモデルとして世界8工場体制での海外事業展開につながった。その甲斐あってキッコーマンの海外比率は直近で、売上高で7割、事業利益では8

みなさまの身近で

くらしをささえる容器包装。
社会インフラとも言える大切な役割を担っています。
これまで培ってきた包装技術を基軸に
総合力を活かした価値創造でさらなる飛躍をめざします。

CAN 東洋製罐
https://www.toyo-seikan.co.jp

食品の森®

食品の森